

変化するニーズに応える 消防大学校を目指して



消防大学校長 羽生 雄一郎

消防大学校に着任して4ヶ月、当方はかつて消防庁総務課の理事官として消防庁の組織や予算の総括を担当させて頂きましたが、当時（平成18～19年度、以下同じ）と比べ、消防も消防大学校も大きく進化していることを実感する日々です。

本稿では、当時との比較を交えつつ消防大学校の教育訓練の充実の一端を御紹介させていただきます。

当時は、緊急消防援助隊や消防の広域化が消防組織法上に位置づけられて間もない時期でした。この頃も国の財政は厳しく、予算の確保には苦勞しましたが、緊急消防援助隊の充実強化に必要な予算は、制度の法制化もあり財務省も理解を示していました。そのような中、NBC災害に備えた装備の必要性を、本音ではそのような災害が起きないことを願いつつ説明したことを覚えています。その後、東日本大震災により福島第一原子力発電所の事故が発生してしまいましたが、緊急消防援助隊の皆さんの活躍もあって事態は収束に向かいました。

今ではNBC災害対応は消防大学校の緊急消防援助隊教育科NBCコースとして確立されていますし、同教育科は指揮隊長コース、航空隊長コース等も含め、これまでの出動実績を反映したより実戦的なものとなっています。

また、隣接する消防研究センターの大規模火災実験棟は、平成28年度から同センターの協力の下、消防大学校危険物科等において、タンク火災等を想定した日本でここでしか経験できない体験型訓練を実施する場ともなっています。訓練の状況を初めて視察し熱気を体感しながら、消防大学校の進化を実感しました。

これに先立ち平成24年からは実火災体験型訓練（いわゆる「ホットトレーニング」）も導入しています。燃焼が起きている高温の施設内での訓練は、実施側も含め高い緊張感を伴いますが、火災現場の経験が少ない若年層の職員が増える中で、貴重な経験をもたらす場となっています。

平成29年度から始めた女性活躍推進コースは、年々活躍の場を広げる女性吏員を多数受け入れ、参加者の満足度も高いものとなっています。

このほか、救助科や警防科等ではドローンを活用した上空からの映像による活動の検証、フィードバックなどもすっかり定着しています。

直近では、1月の能登半島地震における教訓から、今年度の警防科と救助科において、相模原市消防局のご協力の下、道路啓開訓練を取り入れました。

目に見えにくい部分も大きく進化しています。当時は試行的なものだったeラーニングも今や定着し、入寮期間の短縮による現場活動への影響の軽減等に繋がっています。消防吏員の世代交代に伴い、安全管理やハラスメント対策を重視した教育課程の見直しも行っています。

紙幅の関係で全ては紹介できませんが、このように、消防大学校では、気象の激甚化や火災態様の複雑化などますます厳しくなる現場の課題に対応し得るよう、教育訓練の更なる充実を目指して教職員一同取り組んでいます。進化を遂げた消防大学校への派遣を歓迎しますとともに、カリキュラムの充実に向けた皆様からの御意見・御提案をお待ちしています。